神を映し出す鏡
――偽ディオニュシオス・アレオパギテースにおける天上の存在者の位置づけ――

大月栄子

はじめに

偽ディオニュシオスの思想は『天上位階論』第一章で引用されている「すべてのものは、神から出て、神に向かっている」[1]という聖書の言葉に象徴されるとおり、神から発出された被造物、特に人間がいかに神からの照明を受けて、神に向き直ることができるか、ということを根本的なテーマとしている。偽ディオニュシオスにおいて、神はすべての存在者からはるかに隔たっており、我々には知りえないものである。しかし、我々は神をどのようにしても知りえないわけではなく、聖書において開示されたことを観照することによって、神について何事かを知ることができる。神への向き直りへの途も、このような神の開示を通して開かれる。それは、伝統の中で定められた儀礼の解釈を通して、あるいは、聖書の中に現れる、神の知性的な名称の考察を通して実現されていく。そして、感覚や知性を超えた仕方で神へと上昇していく、もしくは引き上げられていく過程において完成されるように思われる。

　他方で、偽ディオニュシオスは天上の存在者、つまり天使について頻繁に語っている。『天上位階論』は全編を通して天使が構成するヒエラルキアの各々の階級や天使の名称や形象の説明に費やされているし、『神名論』第四章においても善という神名について論じる傍ら、天使についても言及している。こうしてみると、偽ディオニュシオスの思想全体において天使論は大きな割合を占めているようである。これほどに大きく扱われる天使論は彼の思想においてどのような意味を持つのだろうか[2]。彼は天使をどのような存在だと考えているのか。また、先ほど述べた、聖書の中の神の自己開示の解釈による上昇とどのように関係しているのか。本論では偽ディオニュシオスにおいて、天使とはいかなる存在者として捉えられているのか、また、我々人間の神への向き直りと上昇という文脈において、天使論がどのような意味を持ち、どのような役割を果たしているかを、『天上位階論』で示される、天使の多様な象徴から探求したいと思う。その際、それら象徴の逐一を問題とするのではなく、天上の存在者が象徴を使って表現されること自体に焦点を当てて考察していきたい。

一　天使の象徴と神の象徴

『天上位階（ヒエラルキア）論』[3]はその書名の示すとおり、天

上の存在者たち、つまり天使のヒエラルキアについて論じられているのであるが、その内容は主として聖書の中で天使に対して付与されている諸々の象徴と階級ごとの名称の解説に費やされており、聖書解釈の様相を呈している。たとえば第二章では、一見天使には似つかわしくないような質料的で不適切な形象も聖書で使用されていることに触れている。それは獅子や馬や鳥の群れなどの形象であるが、こうした適切でないように思われる形象は、金やきらきら輝く人のように一見美しい形象よりもむしろ我々の魂を上昇させると述べている[4]。また、終章の第一五章でも聖書における天使の様々な質料的形象を概観している。そして第七、八、九章ではセラフィム、ケルビムなどの、それぞれの階級に属する天使の名称が示され、それらがエティモロギーで説明されている。天使たちに与えられる聖書の中のこうした多様な象徴を解釈する偽ディオニュシオスの意図は何であろうか。

先ず、天上の存在者たちについて聖書の中で用いられる象徴について考えてみたい。天上の存在者たちが、聖書の中で様々な象徴によって示されるのは次のような理由によるという。「(人間を愛する聖化の根源は) 感覚的な像によって天を越えた知性を、御言葉の聖なる書の文面に書き記したが、それは感覚的なものを通して知性的なものへ、また神的に形作られた象徴から単純な天上のヒエラルキアの卓越性へと我々が導き上げられるためである[5]」。つまり、我々の知性にとってより容易な方法、すなわち感覚的なものの認識を通して、純粋に知性的なものである天上の存在者について何らかの認識を持つことができるように、聖書は多くの質料的な象徴を用いて天上の存在者を表現しているのである。それは、多数の脚や顔をもつものだとか、牛やライオンのような獣の形などのような、一見より適切でないと思われる形象もあれば、輝く美しい衣を着た人や火のようなものなどの、一見すると比較的適切であるように思われるものもある[6]。

ところで、聖書においてこうした象徴を用いて表現されているのは天上の存在者に限ったことではなく、神自身についても同様であるとして、偽ディオニュシオスは次のように述べている。「神秘的なテオロゴスたちは聖なる仕方で、天上の階級の顕示に対してだけでなく、時にはテアルキア自身の啓示に対してもそれら（似つかわしくない象徴）を貼り付ける（περιπλάττοντας）ということを我々は見出すであろう[7]。」そこで偽ディオニュシオスは聖書からいくつかの例を列挙している。聖書は神を、「正義の太陽」や「明けの明星」などの価値のある表現、「火」や「水」といった中くらいの価値のもの、そして時には「香油」や「隅石」、あるいは「虫」のような最低のものにたとえているという[8]。『天上位階論』第二章は、主として天使の、特に天使に似つかわしくない象徴表現について説明している章であるが、天使の象徴とともに神自身の象徴についても同様に似つかわしくない質料的な象徴があるとして、常に一緒に論じ

ている。それでは、神の象徴について解説されている、独立した別のテクストはないのだろうか。これについては『神名論』第一章等で若干言及されている箇所を見出すことができる。そこでは、神が人間の身体や火や王冠、玉座などにたとえられていることを挙げ、こうした神の質料的な象徴については『象徴神学』という著作において詳述した、とだけ述べている[9]。しかし、『象徴神学』[10]という著作は現存しておらず、現在では『第九書簡』にそのダイジェスト版のような内容を確認することができるのみである[11]。『象徴神学』というテクストが実際に存在したか否かは不明だが、この書については暗示するだけで実際にはもともと書かれていなかったと推察することもできる。彼は、『神名論』では神に与えられた知性的な名称だけを取り扱っているが、神の象徴表現、特に質料的なレベルの象徴については新たに別のテクストを著さず、『天上位階論』で天使の形象とともに扱うことで充分だと考えていたのかもしれない。それは天上の存在者たちの果たす役割と関係しているように思われる。つまり、天上の存在者たちが、まさに「天使」と呼ばれているということと密接に関係しているのではないだろうか。これについては次章でさらに検討したい。

二　天使という名称と役割

（一）天上の存在者のヒエラルキア

そもそも天上の存在者たちの「天使」という名称は何を意味しているのだろうか。先ず、一般に「天使」と呼ばれる天上の存在者が形成する世界を、ヒエラルキアについて規定されている『天上位階論』第三章から概観したい。次に、「天使」という名称一般に関して説明されている第四章で、天使に関する偽ディオニュシオスの定義を確認しておきたいと思う。

　彼が考える天上の存在者たちの説明は、先ずすべての存在者がその存在の根源を神として、そこから発出されるということの確認から始まる[12]。すべての存在者は神から出ており、夫々の在り様に従ってその根源である神の性質を分有している。たとえば、生命がなく単に存在するだけのものはその存在を、生命のあるものは生命を与えるその神的力を、理性と知性を有するものは、それらを神の知性から受け取っているのであるが、天上の存在者たちは神の最も近くに置かれており、神の神性を他のどの被造物よりも最も多く分有している存在者である。つまり、彼らは被造物の頂点に立つ存在者である。

　しかし、天上の存在者たちの世界も一様ではなく、被造物の頂点である彼らの中にも厳密なヒエラルキアがある。天上のヒエラルキアは、一つの階級が三種の存在者から成る三つの階級によって構成されている。この中で、特に最初の階級は、神の

周りを囲んで廻り、神と協労し、「テアルキアの休息の場所(τῆς θεαρχικῆς《τόποι καταπαύσεως》)[13]」として神を賛美することを務めとしている。偽ディオニュシオスは、第一の階級の存在者たちの、神への賛美という務めを、イザヤ書やエゼキエル書を引いて説明している。また、「第一の階級は、神の言葉の知識を、テアルキアの善性において許される限り照らし出された。そして善に似たヒエラルキアとして、彼らの後の者にそれ(神の言葉の知識)を分与したのである。約言すると、それは、尊敬に値し、至上の賛美に値し、恵まれたテアルキアが、神を受け取る知性によって、できる限り知らされ、賛美されることが、理に適って許されている、と(神の言葉の知識は)教えている[14]」と述べており、天上の存在者において、神を認識することと神を賛美することは直結しているようである。第一の階級は、何の媒介もなく直接神に接していて、神から神的な知の照明を直接受けており、その照明の中で、神の周りを廻りながら神を賛美することをその務めとしているのである。

それでは、彼らよりも下位の階級はどうなっているのだろうか。先にも述べたとおり、天上の存在者の世界には階級[15]があり、最上位の天使から順に神的知識が伝達されていく構造である。したがって、神に最も近い天使が神から直接に神的知恵の啓示を受け、彼らのすぐ下位の天使にその知を伝達し、その天使たちがまたより下位の天使に伝えるというシステムである。神的知恵の啓示は天上の存在者のいくつもの段階を経て、最下位のいわゆる「天使[16]」にまで行き渡っている。彼らのこの秩序は、彼らが「天の使い」と呼ばれていることと深く関係している。神の知識の照明は、彼らの間を伝達されていく。上位の者は下位の者にとっての「使い」となるのである。このヒエラルキアは偽ディオニュシオスによって次のように定義されている。「ヒエラルキアとは、近づきうる限り神に似たものへと似ていき、神からヒエラルキアに与えられた照明へと神に似ることに釣り合った仕方で上昇する、聖なる秩序、聖なる知、聖なる活動である[17]」。これによると、ヒエラルキアとは単なる神からの照明の伝達機関というだけではなく、上位の者から秩序立てて与えられた神の知を通して、それによって神に向かって上昇させられていくためのものでもある。その際、第一の階級のものたちは、神自身を見つめ、できる限り神を模倣する。他方、彼らの後の者たちは、神自身を神的照明の原因としながらも、直接には最初の階級を模倣するのである。つまり、彼らにとって、より直接的な根源は第一の階級となる。「なぜなら、かの者たち(第一の階級に属する天使たち)を通して、すべての階級へ、そして我々に、テアルキアの照明が伝えられるからである。従って、彼ら(残りのすべての天使たちの存在)は、すべての聖なる、神を模倣する活動をも、一方では原因としての神に帰し、他方では、神的なものの第一のものとして、また、教師として、第一の神に似た知性に帰するのである[18]」。また、「天上の知性たちの最も超越的な階級を、残りのすべての天使たちの存在は、似

ていることを通して、神の後の、すべての聖なる神の知識と神の模倣の根源（ἀρχή）とみなす」のであり、最上の階級は「指導者（ἱεράρχης）[19]」とも言われている。第一の階級以下の天上の存在者たちは、すべての神的照明の第一の根源（ἀρχή）としての神であるテアルキア（θεαρχία）を模倣の遠い目標としながらも、より近い根源として第一の階級の存在者たちを目指す。より下位の階級に属する存在者にとって、より上位の存在者は、単に神の知識の伝達と模倣の通過点ではなく、彼らの中に根源の輝きを見るのである。これが天上の世界がまさに「聖なる根源（ヒエラルキア）」として構成されている所以である。

(二)　天使の役割と伝達方法

先も述べたとおり、天上の存在者の世界にはヒエラルキアがある。神の傍らに居て、神から直接に知識を受け取る第一の階級から、彼らより下位の天使たちに神の知が伝えられていく。知の伝達というと、何らかの情報を口伝かあるいは何か書かれたものを通して伝える方法を想像するが、天使の情報伝達は次のようであると言われている。「さて、神に向かってできうる限り似ること（ἀφομοίωσις）、また一致すること（ἕνωσις）がヒエラルキアの目的である。ヒエラルキアは、神自身をすべての聖なる知識と活動の教師として有し、一方では、その最も神的な美しさをできる限り見つめ、他方で、その（ヒエラルキアの）メンバーを神的像へと形づくり（ἀποτυπούμενος）、汚れない最も澄み切った鏡（ἔσοπτρα διειδέστατα καὶ ἀκηλίδωτα）として完成し、光の根源である、テアルキアの光を受容可能にし、また一方では、与えられた光に聖なる仕方で満たされ、他方ではさらに、豊かに次のものへとテアルキアの規定に従ってその光を照らし出すのである[20]」。天上の存在者は、先ず、神の美しさを見つめ、その美しさをできるだけ模倣し、いわば自らを神が映しだされる鏡とし、神の姿を映し出した自らの姿をより下位の者に向かって輝かせるという仕方で神的知識を伝えている。また別の箇所では、「（天上の存在者たちの聖なる階級は）知性的な仕方で天上の存在者たち自身を神の模倣へと形づくり（ἀποτυποῦσαι）、テアルキアの相似を、世を越えた仕方で見つめ、彼らの知性的な形を形作るよう努める[21]」とまで述べており、天上の存在者が自らを神に似た姿へと変えることによって模倣し、彼ら自身が神の像となり、その姿を下位の者に見せる仕方で神の知恵を伝達していることがわかる。

このような方法で、神に関する知識は伝えられていくのであるが、それでも最上位の階級の存在者たちに、神の本質のすべてが映し出されるわけではない。神は存在者の世界からはるかに隔たって超越しており、それは我々人間にとってだけでなく、天上の存在者にとっても同様である。「そのテオロゴスは、神的なものが存在を超えたすべての卓越性に従って、類ない仕方でことごとくすべての可視的、不可視的な力を超えており、すべてから自由であり、存在者のうち第一の者たちにも全く似ていない……（中略）ということを学んだのである[22]」。神から直接に

照明を受けているはずの最上位の存在者たちでさえ、神には「全く似ていない」。神は存在者にとってあくまで隠されており、知られざるものである。第一の階級の天使は、「隠れたものを明らかなもの[23]」として導き出すのみである。従って、神の知識の伝達は、神自身をそのまま映し出すことができないために、第一の段階で既に、ある不明瞭さを含んでいる。天使が神を映しだす者であるとはいえ、完全に神を映し出せるわけではないのである。神の本質自体は最上位の者によっても映しきれないほど被造物の世界を超えている。神と被造物は本質的に全く異なったものとして、両者の間には深淵がある。

また、最上位の者から伝達された神に関する知識が、最下位の者にまで達するには多くの媒介を経ており、このため神的知識は、最上位の者がこれを受け取ったときに比べると、次第におぼろげなものになっている。それは偽ディオニュシオスが「ある天使を通して語られた便りが他の天使へと進んでいくということは、遠くから完成が、発出を通して第二の階級へと(伝わって)弱くなっていくことであると我々がみなしていると考えて差し支えない[24]」と述べていることから明らかである。このように、天上の存在者夫々が神から直接に神的な知識を得ることも、直接神を模倣していくこともないこの伝達システムは、各々の存在者が自らの状況において、「各々に適した仕方で」あるいは「できる限り[25]」の範囲で神からの照明を受け入れ、また神に向き直っていく一つ一つの段階を示しているように思われる。それは神的な光線が、見えざる神の光源から明らかなものとして表され、最上位の階級の明るさから次第に弱くなっていくという光のグラデーションのようである。しかし、夫々の段階の存在者は、神を光の根源としながらも、直接的には自らのすぐ上にある存在者の階級しかみない。彼らにとってすぐ上にある階級に属する存在者は、光源である神のはるかな「こだま[26]」を有している存在者として、根源(ἀρχή)そのものではないとしても、根源を有するものなのである。夫々の階級の存在者たちは、真の根源である神のこだまを有する。存在者の世界はこのように、神には似ても似つかないものとして断絶していながらも、そのこだまを通して繋がることができる。

先も述べたように[27]、天上の存在者のこの伝達システムは、神に関する知識の我々への伝達にも関係している。偽ディオニュシオスは「だが、イエズスの人間への愛の神的な神秘も、第一に天使たちが伝授され、次に彼らを通して、知の恵みは我々へと進んできたと私はみている[28]」と述べており、我々人間が神から直接神的知識を得ることはなく、その知は天使を通して我々に伝えられると述べている。彼は他にも、祭司ザカリアへの洗礼者ヨハネの誕生の預言や、マリアへの受胎告知、羊飼いに現れた天の大軍に言及し、神に関する知の我々への開示が天使を媒介とすることを明らかにしている。我々への神的知の伝達が天上の存在者を介して初めて実現されるのは、我々人間にとって、神ははるかに超越した存在であり、我々には知り得ないと

いうこと、また神について何事かを知りうるとしても、それは我々の本性に即した仕方を通してであるとする偽ディオニュシオスの考えに基づいている。我々は知性的なものを直知することはできず、感覚的なものを通して知性的な認識に至る。天上の存在者たちは、神を認識し、賛美すること、またそれを下位の者たちに伝え合うことを通して「天使」と呼ばれるが、我々にとっても天使の表す象徴を通して神を開示することで、彼らは「天使」という名で呼ばれるにふさわしいのである。

以上のことから、天使の象徴は、それがどのようなものであれ、神を模倣した形の一つであり、つまり神を表すものであるといえよう。それではこうした諸々の象徴と、九つの天使の名称は別のものであろうか。それとも、天使の名称もまた象徴の一つに数えられるのであろうか。

三　天使の象徴と名称

（一）天使の名称

偽ディオニュシオスは、天上の存在者が聖書の中で九つの名前で呼ばれており、それぞれ三種の存在者からなる三つの階級に区分されると述べている。その天上の存在者たちの世界は、第一の階級はセラフィム（σεραφίμ）、ケルビム（χερουβίμ）、王座（θρόνος）、第二は主権（κυριότης）、力（δύναμις）、能力(ἐξουσίος)、第三は権勢(ἄρχων)、大天使(ἀρχάγγελος)、天使（ἄγγελος）から成る。[29] これらは、天上の存在者の名称なのか、あるいはこれらも象徴なのだろうか。

先ず、これらの天使の名称の説明を吟味しておきたい。第一の階級の最高の存在者たちがセラフィムと呼ばれるのは、彼らが火の特性を有しており、神の周りを廻るその運動から発する熱や、完全に焼き尽くすことで浄化する力や、より下位の存在者たちを燃え立たせるという特性の故であると説明される。[30] ケルビムは、知恵の大きさ、知恵の溢れ、神の美しさを観想し、認識できる力、また知恵を与える働きであると言われている。また王座は、神を運ぶことや神から来るものを受け取る特性として描かれている。以上の、最上位のヒエラルキアでは、天使の名称の説明は、ほとんど字義通りで、火、知識、座の性質を天上の存在者にふさわしくなるよう解釈したものである。[31]

中間の三つの存在者たちの名称は次のように説明されている。まず主権は、何ものにも隷属しないこと、地上の低い状態から自由であること、主権の根源を見つめ、その類似性を分有し、後の者たちを善に似たものとすることである。力は神の照明を受け入れるのに無力ではないこと、神に向かって力強く上昇することであり、力の根源を見つめ、それに似た者となり、後の者にその力を与える。能力は、能力の根源を見つめ、能力の根源を後の者のために照らす。以上のように、中間の階級もまた最上位の階級の各々の名称と同様に、その言葉の持つ意味を天上の存在者の役割や特徴に当てたものである。そして、主

権、力、能力に共通して言われているのは、彼らがその名称の特徴の根源である神を見つめ、その特徴を模倣し、その模倣によって下位のものにその特徴を伝えたり与えたりしているということである。[32]

最後の階級は、先の最上位の階級や中間の階級に比べるとやや簡潔な説明となっている。権勢は、先の中間の階級の特徴と同様に、自らが権勢を有する者であり、権勢を創り出すもの自身を模倣して、その権勢を下位の者に示すというものである。大天使は、それ自体としての説明はなく、ただ権勢と天使の両方に接しているがゆえに、双方の特徴を有するというだけである。天使についてはそのほかの階級よりも我々の世界との関わりが深いため、特に天使という名で呼ばれるというほどの説明である。[33]

三つの階級夫々の説明は、以上のような名称の解釈以外では、上位のものから下位の者への神の知識の伝達経路についての叙述である。確かに、最上位の存在者たちは直接神からの照明を受け、それを下位の者に伝え、下位の者は上方を眺めながら、自身もそれに似たものとなり、それをさらに下位の者に伝えていくという構造は厳密に語られているが、肝心の夫々の存在者の固有性は、その名称に由来する特徴のみである。そして、その特徴はすべて神を起源とし、神の性質を模倣したものである。したがって、天上の存在者に与えられる名称は、すべて神の特徴の一端を映し出したものということになる。

（二）　天使の象徴

さて、天使の象徴については先も述べたように、第二章で質料的な形象など天使にふさわしくないと思われる形象が取り上げられている。そこでは、怒りや欲求などの情念が、剛毅や神への情熱として捉え直されている。また第十五章では聖書に現れる多くの象徴表現が多数紹介されており、夫々に簡単な解説がつけられている。例えば、燃える車輪や輝く人などはセラフィムの具える火の特性と関連付けられている。[34]偽ディオニュシオスによれば、火の特性は最も神に類似した性質であるから、それはセラフィムのみならず天使一般に適用されるべきであるとしている。また、人間からとられた形象は人間の有する知性や身体性を神と類似するものとして解釈している。[35]第十五章ではこのほかに、輝く衣や風、雲、青銅や琥珀、獅子などの獣が聖書の中で天上の存在者の象徴として描かれることについて、先の名称と同様に、それらの言葉に天使にふさわしい解釈をつけている。[36]

（三）　天使の名称と象徴

以上のように、天使の名称と象徴を比較してみると、いずれもその名称や象徴の意味を天上の存在者に付与されるにふさわしくなるよう解釈し直している点でさほどの差異はないように思われる。一方では、火や知識など高尚な象徴であり、第十五章で纏めて論じられている形象はより質料的で我々の感覚に訴える身近な象徴であるといえよう。神自身については、質料的

な象徴が、現存していない『象徴神学』（『第九書簡』）で論じられ、知性的な名称が『神名論』で独立して論じられていることになっている。天上の存在者についても同様に、知性的でより価値のある象徴と、質料的で、より適切でないように思われる形象が区別されているのではないかと思われる。その意味で、輝く衣や青銅などの諸々の象徴を通しての現れも、火や知識といった彼らの役割を示す名称も天上の存在者の特徴の一側面を指しているものである。従ってそれは神の性質の一端を表現しているともいえよう。

四　人間の魂の上昇における天使の象徴の役割

天上の存在者たちは、神を見つめ、神を模倣し、自らを神に似た姿に変化させ、彼らの間で神を伝え合い、また様々な象徴によって我々に神を開示している。この役割のゆえに彼らは「使い」と呼ばれるのである。天上の存在者たちが我々の神への上昇の過程にとって重要であるのはこの役割のためであると思われる。偽ディオニュシオスは、天使という名称一般について扱っている第四章の冒頭で次のように述べている。「それゆえ、ヒエラルキア自体がいったい何であるかを我々は正しく定義したと思うので、次に天使たちのヒエラルキアを讃えなくてはならない。御言葉におけるその聖なる形象を、世を越えた眼を持って観想しなくてはならないが、それは我々が神秘的な表示を通して神に最も似た天使たちの単純さへと引き上げられるためであり、またことごとくすべてのヒエラルキアの知識の根源を、神にふさわしい崇敬と完成の根源への感謝によって讃えるためである」[37]。これによれば、天上の存在者はたとえ天使の示す諸特徴が、神自身を表すのに不十分であるにせよ、我々にとって観想する対象であることになる。天上のヒエラルキア間での神の知識の伝達がそうであるように、天上の存在者から我々への伝達もまた、我々が、神を映し出す鏡である天上の存在者を見つめ、我々の模範とすることで、彼らを通して神を見、彼らに類似していくことで神に類似していくという仕方でなされるのであろう。このように、我々が天使の象徴を観想することで、神に向かって上昇することができるとすれば、それは天使たちが纏う象徴が、美しいものであれ、醜いものであれ、神の何らかのこだまを有しており、我々は彼らを通して神を見つめることができるのである。その意味で、天使の象徴は、天使の特徴を表すとともに、神自身を表示しているのではないだろうか。天使は神を映す鏡となり、神的な像へと自らを形づくることで、自身を通して神を表しているからである。

おわりに

本論では偽ディオニュシオスにおいて人間の魂が神へと上昇していく過程での天使の役割について、天使を象徴化すること

を通して考察してきた。聖書において天使は様々な名称や質料的な形象で表されている。それらは天使各々の特徴であると同時に神の諸特徴の映しであるとも言える。彼らのうち最初の階級の者たちは直接に神を眺め、直接に神からの照明を受けて神に似たものとなり、神を模倣する。そして彼らより後の者たちは、彼らを眺めることで神の知識を得、神に似たものとなる。このような秩序をとおして、神の知識は我々にまで到達するのであるから、天上の存在者たちが我々に開示する象徴や名称は我々に神自身を表しているといえよう。偽ディオニュシオスは『天上位階論』第十五章で、天使の質料的な象徴に立ち戻り、聖書に書かれている天使の象徴を次々と解説している。天使の象徴が神の特徴の開示であるとすれば、彼はこれによって、神自身についての質料的な形象表現の解釈に代えたのではないかと思われる。天使に似つかわしくないと思われる質料的な形象と、天使にふさわしいと思われる知性的な名称では、扱われる割合は後者のほうがはるかに大きい。このことからも知性的な名称のほうが質料的な形象よりも重視されているように思われる。そのため、天使の質料的な形象は第二章と第十五章でわずかに触れられているだけである。同様に、神に関する感覚的で質料的な形象についても『天上位階論』第二章と『第九書簡』で少し触れられている程度である。それは天使の示す象徴が完全な映しではなくとも、神自身の表現であるからではないか。

彼の天使論が、我々の上昇において何らかの意義があるとすれば、天使という存在や役割、配列自体などに力点があるのではなく、むしろ彼らの象徴の解釈と観想によって我々が上昇させられていく道筋がヒエラルキアとして描かれているということが肝要なのではないかと思われる。[38] 彼は、天使は我々にとって観想対象であると述べている。[39] それは聖書に著されている天使という神の象徴を眺め、解釈しながら、我々の模範として彼らに類似していくよう、観想を深めていくためではないだろうか。

註

(1) De Coelesti Hierarchia, I, 1, 121A / Rom. 11:36（以下 CH と略す）。

(2) 偽ディオニュシオスは、彼が「我々のヒエラルキア」と呼ぶ聖職や儀礼から成る地上の教会内の秩序は、天上のヒエラルキアに質料的な形を与えたものであると述べている。「それゆえ、完成させる清めの規定は、天上のヒエラルキアの模倣を求め、いわゆる非質料的なヒエラルキアを質料的な姿かたちや形あるものの組み合わせによっていろいろに飾り、我々の最も聖なるヒエラルキアを与えたのである」。CH I, 3, 121C.

(3) Aland und Mülenberg 版ではこのテクストのタイトルは「長老（あるいは司祭）ディオニュシオスから同僚の長老（司祭）ティモテオスへ。天上のヒエラルキアについて

（ΤΩΙ ΣΥΜΠΡΕΣΒΥΤΕΡΩΙ ΤΙΜΟΘΕΩΙ ΔΙΟΝΥΣΙΟΣ Ο ΠΡΕΣΒΥΤΕΡΟΣ ΠΕΡΙ ΤΗΣ ΟΥΡΑΝΙΑΣ ΙΕΡΑΡΧΙΑΣ）」である。

（4）非類似形象については、拙稿「類似しない類似」『基督教学研究』第二十三号、二〇〇三年、一〇三—一一二頁参照。

（5）CH I, 3, 124A.

（6）CH II, 1, 136D-137A/II, 3, 141B.

（7）CH II, 5, 144C. 「テオロゴス（θεολόγος）」は偽ディオニュシオスにおいては、いわゆる神学者というより、聖書記者や、神について教える人全般を指す。
「テアルキア（θεαρχία）」は、θεός と ἀρχή から成る偽ディオニュシオスの造語。神を端的に表すとき、θεός と表記することは少なく、この「テアルキア」が使われる。

（8）CH II, 5, 144C 以下。

（9）「あるいは善に人間や火や貴金属の形や型を与え、その眼、耳、髪、顔、手、背、翼、腕、背面、脚などを讃えている。また、王冠、玉座、杯、混酒ボウルやその他の神秘的道具をその周りに配している。これらについては、『象徴神学』においてできるだけ力を尽くして語るであろう」。De Divinis Nominibus, I, 8, 597A-B.（熊田陽一郎訳『神名論』、『キリスト教神秘主義著作集 一』教文館、一九九二年、一四八—一四九頁）。他に『神秘神学』第三章、『天上位階論』第十五章で言及されている。

（10）現存していない、偽ディオニュシオスの著作のひとつで、失われてしまったのか、それとも架空の書であるかは不明である。このほかに『神学概論』、『神の讃歌について』、『魂について』、『天使の特性と秩序』など現存しないいくつかの著作への言及がしばしば見られる。いずれも紛失したのか架空の著作であるかは不明。中でも『象徴神学』は『神学概論』と並んで言及が多い。

（11）『第九書簡』はティトスという人物に宛てた手紙の体裁をとっており、この手紙を添えて『象徴神学』の全巻を送ると述べている。ティトスという人物については不明。Epistola 9, 1113B-C.

（12）「すべてのことに先立って、かのこと、つまり、存在を超えたテアルキアは存在者のうちのすべての存在を善性によって存在させ、存在することへと引き出すということは真であるといわねばならない」。CH IV, 1, 177C.
P・ローレムは、聖書や儀礼の中の象徴への神的なものの下降は、存在論的な問題ではなく、認識論的な照明や啓示であるとしている。Paul Rorem, Biblical and Liturgical Symbols within the Pseudo-Dionysian Synthesis, Tronto, 1984, pp.66-67.

（13）CH VII, 4212C. 聖書からの引用「休息の場所」はイザヤ六六・一、歴代誌下六・四一など。

（14）CH VII, 4212B-C. 偽ディオニュシオスは、天上の存在者

たちの神への賛美について、現存しない他の著作で明らかにしたという。「我々は、天上を越えた知性のうち、最も卓越した賛美の歌を、既に『諸々の神の賛歌について』においてできる限り明らかにした。その書では、それら(賛歌)について、我々にできる限り充分に語られた。今のところ、それを思い出すことで充分であろう」。CH VII, 4, 212B.

(15) 天上の存在者だけでなく、地上においても『教会位階論』で展開されている、偽ディオニュシオスが「我々のヒエラルキア」と呼ぶヒエラルキアがある。このヒエラルキアは教会内の秘蹟と聖職から成っている。註(2)参照。

(16) 天上のヒエラルキアは三種で一組の天使が三つの階層を構成し、全体で九つの天使群から成っている。九つの天使の中で最下位の階級を「天使」という名称で呼ぶが、天上の存在者全体を指して一般に「天使」とも呼ぶ場合もある。

(17) CH III, 1, 164D.

(18) CH XIII, 3, 301D-304A.

(19) CH XIII, 3, 304B.

(20) CH III, 2, 165A.

(21) CH III, 2, 180A.

(22) CH XIII, 4, 304C-D. この箇所の「テオロゴス」はイザヤを指している。

(23) CH XIII, 4, 305B.「(テアルキアは) 夫々に即して第二の者たちには、第一の者を通して照明し、もし簡潔に言わなくてはならないとすれば、第一の仕方で(πρώτως)、第一の諸力を通して、隠れたものから明らかなものへと導き出されるのである」。CH XIII, 4, 305B.

(24) CH VIII, 2, 240C.

(25) 「(各々に)適した仕方で(ἀναλόγως)」「できる限り、達しうる限り(ὡς ἐφικτόν)」は偽ディオニュシオスが好んで用いる表現。存在者夫々が、夫々に適した仕方で神的光を与えられており、夫々の状態に応じて神への上昇を希求する。

(26) 「こだま(ἀπήχημα)」『天上位階論』第二章で、偽ディオニュシオスは、すべての存在者は、たとえ質料的なものでさえ、それを通して神へと上昇することができるような神との類似性を有していると述べ、これを「こだま」という語で表現している(CH II, 4, 144B-C)。

(27) 註(18)の引用。「かの者たちを通して、すべての階級へ、そして我々に、テアルキアの照明が伝えられるからである」。

(28) CH IV, 4, 181B.

(29) 天上の存在者を三種ずつまとめて、三つの階級に分けて順序だてたヒエラルキアは、偽ディオニュシオスのオリジナルではない。偽ディオニュシオス以前にもエルサレムのキュリロスや金口のヨアンネス、ニュッサのグレゴリオスらが聖書的な名称によって天上の存在者のリストを完成さ

せている。ただ三つずつの三つ組みパターンの構造にしたのは、偽ディオニュシオスだけである。Andrew Louth, Denys the Areopagite, Wilton, 1989, pp.35-37.
　偽ディオニュシオス自身の言葉によればこの三つ組の構造は「我々の神的な伝授者（ὁ θεῖος ἡμων ἱεροτελεστὴς）」によるとされている。CH VI, 2, 200D. この「伝授者」といわれている人物が誰かは特定できないが、しばしば彼の著作に登場する彼の師ヒエロテオスと考えられる。ヒエロテオスは実在の人物か架空の人物かも定かではない。『神名論』（DN III, 681A）では『神学綱要（αἱ θεολογικαὶ στοιχειώσεις）』の著者としても登場する。プロクロスに同名の著作がある。A・ラウスは、ヒエロテオスは偽ディオニュシオスにとって、聖書や儀礼の隠された意味に通じた人物であったとしている。Louth, pp.28-29.

(30) CH VII, 1, 205B-C.

(31) CH VII, 1, 205B-D.

(32) CH VIII, 1, 237B-240B.

(33) CH IX, 1, 257B-260A.

(34) CH XV, 2, 328D-329C.

(35) CH XV, 3, 329C-332D.

(36) CH XV, 4, 333A-337C.

(37) CH IV, 1, 177B-C.

(38) ローレムによれば、偽ディオニュシオスの基本的な解釈上の関心は、天使の活動ではなく、現れのほうである。聖書からの形象の引用も、一節全体を取り出して扱うことはなく、名称や形象だけを抜き出して解説している。Rorem, pp.72-73.

(39) CH IV, 1, 177B-C.